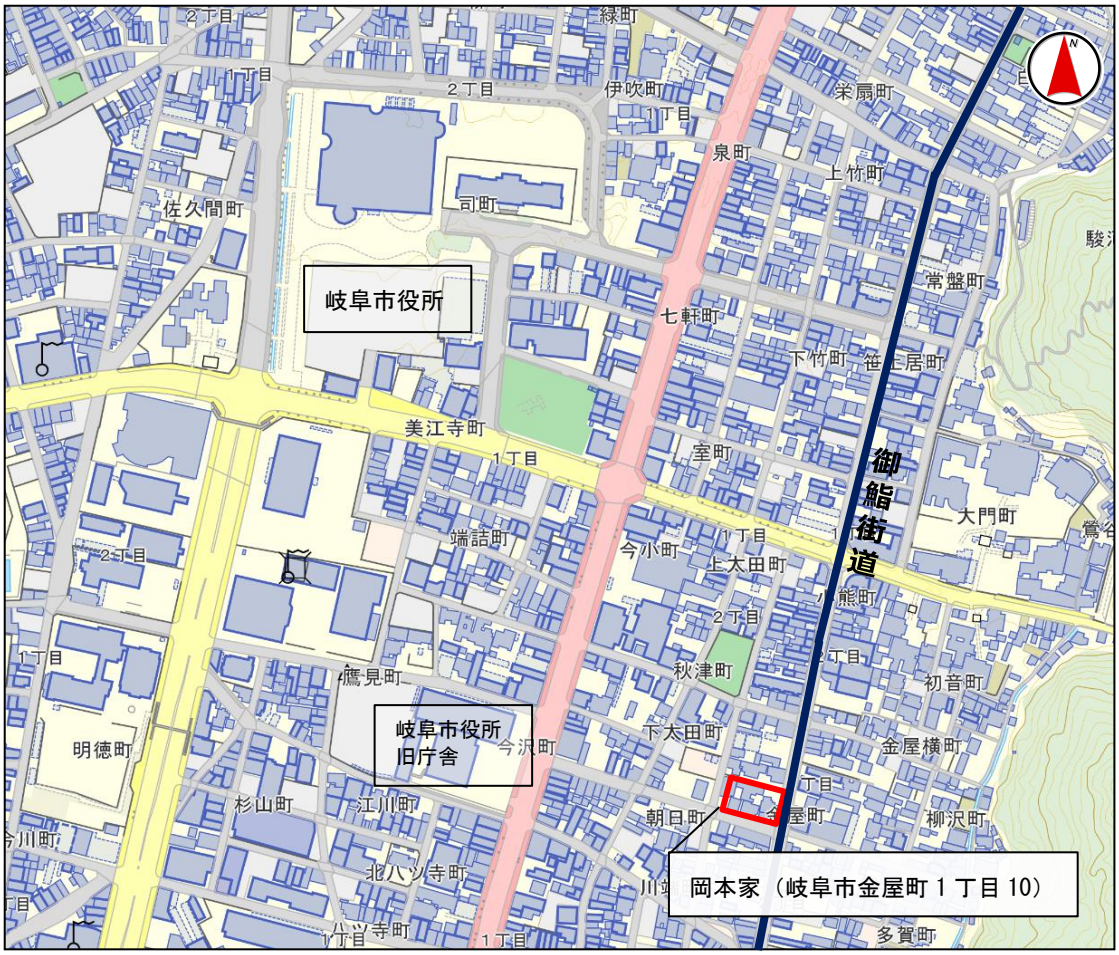
建造物の概要

通番	名称	種別	建築年代	建築面積	構造及び形式	員数
1	岡本家住宅茶室（おかもとけじゅうたくちゃしつ）	建築物・住宅	大正２年頃／令和２年改修	２０㎡	木造平屋建、瓦葺一部檜皮葺及びこけら葺	１棟
2	岡本家住宅待合（おかもとけじゅうたくまちあい）	工作物・住宅	大正２年頃	３．８㎡	木造、杉皮葺	１棟
所在地	岐阜市金屋町１丁目１０					
登録基準	茶室：（２）造形の規範となっているもの 待合：（１）国土の歴史的景観に寄与しているもの					

位置図



岡本家について

岡本家は岐阜市で１５代続く家系で、初代岡本太郎右衛門が永禄３年（１５６０）に鋳造業を創業したことに始まる。岡本太郎右衛門は、織田信長の家臣として後に信長の三男・織田信孝に仕えたが、千利休とも親交があったことを示す書状が残されている。

岡本家は、京都御所へ灯篭を献上したほか、代々、鍋、釜、梵鐘等の鋳造を続け、柴又帝釈天、成田山など全国各地の寺院に梵鐘を納めた。

明治維新後は、明治１３年（１８８０）年に１２代の太右衛門が濃厚会社（金融業）を設立し、明治２６年（１８９３）に濃厚銀行に改称したほか、岐阜電燈を設立するなど、近代産業の形成と発展に貢献した。

また、大正１２年（１９２３）年には１３代の太右衛門が鋳造部を分離独立させ、（株）鍋屋鋳造所を設立し、琺瑯技術を導入し、琺瑯鍋「鍋屋Ｎブランド」として海外への輸出を拡大した。

岡本家住宅茶室及び待合のポイント

・茶室の建築には、松尾流９代松尾宗見（半古斎（１８６６～１９１７））がその指導に関わったと推定されている。岐阜には半古斎が建築指導に関わった茶室が多く残されている。

・茶室の扁額には「舊風」の二字が彫刻される。「舊風」は大徳寺の僧・清巌宗渭（安土桃山、江戸前期の臨済宗の僧）の墨蹟に因んで命名されたと考えられる。

・茶室は、客畳として丸畳２枚、手前畳として台目畳１枚からなり、客畳と手前畳の間に中板を入れて炉を切った「二畳台目中板入り」の茶席である。

・茶室内部の壁は土壁で、藁苆を使用することで意匠に工夫を凝らしている。

・待合は、菱格子の円窓を通し、庭の眺望を楽しむ趣向が凝らされている。

１　岡本家住宅茶室　特徴

岐阜市の金屋町に位置する旧家の茶室。主屋の北妻に接続する切妻造妻入桟瓦葺で北面に檜皮葺、西面にこけら葺下屋を付す。内部は南半をカッテ、北半を水屋と茶室とし、茶室は二畳台目中板入りで南東に床を構える。屋根に変化を付けた丁寧な造りの茶室。

※建築年代は表具の請求書による。松尾流九代松尾宗見が建築指導に関わったと推定。

令和２年に土壁塗直し。岡本家は室町時代から鋳物業を営み近代以降は電力業や金融業を手がけた旧家。

用語解説

・切妻造（きりづまづくり）

建築様式の一つで、棟を境に本を半開きに伏せたような屋根の形式。

・妻入（つまいり）

大棟と平行な方向に入口のあること。建物の妻側に入口のある場合をいう。

・桟瓦葺（さんがわらぶき）

主として桟瓦（断面が波形の瓦）を用いて葺いたもの。

・カッテ（勝手）

茶事や茶会の折に予備の湯水や炭火などを用意するための部屋。

・水屋（みずや）

茶室の隣にあって、点前の用意をするための２畳から４畳半ぐらいまでの広さの室。茶道具を整える水屋棚、料理をする炉、茶器を洗う簀の子流しを備える。

・二畳台目中板入り（にじょうだいめなかいたいり）

客畳（客が席を占める畳）として丸畳（１畳の広さを持つ畳）２枚、手前畳（亭主が点茶をする位置に置かれている畳）として台目畳（丸畳の約３／４の大きさの畳）１枚からなり、客畳と手前畳の間に中板（点前畳と客畳との間に畳の長さに沿って入れる長方形の地板）を入れて炉を切る形式の茶室。

・松尾流（まつおりゅう）

松尾流は名古屋における千家茶道の普及に尽力した茶道の流派で、表千家の茶匠松尾宗二（１６７７～１７５２）を流祖とする。九代の宗見（半古斎）（１８６６～１９１７）は、京都の大徳寺等で修行を重ね、長い禅僧生活の体験のもと、茶道の振興に尽くした。明治年間には、名古屋の松尾流の稽古場であった暫遊亭を伊奈波神社に移築し、岐阜における松尾流の本拠とした。岐阜には半古斎が建築指導に関わった茶室が多く残されている。

茶室外観（北東より望む）

茶室内部（東より望む）

２　岡本家住宅待合　特徴

茶室の北東に西面する待合（まちあい）で敷地東辺に沿って建つ。平屋建の杉皮葺片流（すぎかわぶきかたながれ）で、待合の南側に落棟（おちむね）の雪隠（せっちん）を付属する。軸部は主として丸太を用い、軒は小丸太の垂木（たるき）。西面南半の出入口以外を土壁とし西壁に円窓（まるまど）の下地窓（したじまど）を開ける。旧家の落ち着いた露地（ろじ）を構成する。

※建築年代は茶室と同時期と推定。岡本家は室町時代から鋳物業を営み近代以降は電力業や金融業を手がけた地元の旧家。

用語解説

・待合（まちあい）

茶事や茶会において、客が連客を待合せたり、席入りの準備をするための空間。

・片流れ（かたながれ）

屋根の一形式。屋根面が一方だけに傾斜しているもの。

・落棟（おちむね）

主屋の大棟より一段低い棟。

・円窓（まるまど）

正円または下部を欠いた円形の窓で、採光・通風用の窓として使われる。

・下地窓（したじまど）

土壁の一部を塗り残して壁下地を現したもの。

・露地（ろじ）

茶室に通ずる狭い通路に設けられた庭。二重露地において露地入口に近い方を「外露地」、茶室に近い方を「内露地」という。

待合外観（南西より望む）

待合外観（北西より望む）